

び方を習得し、自発的な動きを表出できるようになったり、表出に変化が出てきたりします。そこから満足感や達成感、次の遊びへの期待感へと繋がっていきます。日常の様子と照らし合わせながら、子どもたちがどんなことが好きか、どんな遊びが心地よいと感じられるのかを考え、それぞれの発達に合った遊び方を提供するようにしています。

4月から6月は紙遊びを行いました。紙は、見たり、聞いたり、触ったりすることができ、比較的誰にでも楽しめる遊びで、新聞紙、チラシ、障子紙、プラワー紙、キラキラテープなどを使用しています。クシャクシャにしたり、引っ張ったり、破いたりして遊びます。紙テープやキラキラテープを吊るして揺れる動きを見たり、ちぎった紙を入れたビニールプールで感触を楽しんだりしています。

Aちゃんは、切れ目を入れた障子紙を両手に握らせると、両腕を左右に開いて破いていきます。筋緊張が強いため、三角マットを3枚重ねた上にU字クッションを背中と膝裏に置き、座位姿勢を安定させ、肘がスムーズに動くようにします。力の入れ具合が難しく、腕が動き始めるまでに時間が要しますが、紙が破

れていくと笑顔を見せてくれます。日常生活の中で、視線や発声でアピールして、職員との関わりを楽しみにしているAちゃんなので、最初は紙を破るということを楽しむより、職員の声掛けを期待して視線を向け、声掛けに対して笑顔を見せていました。しかし、遊びを繰り返していくと、Aちゃんの表出に変化が見られました。まず紙に視線を向け、破れていくのを注視しながら腕を動かします。破り切ったところで職員の方を向き、声を上げながら笑顔を見せてくれるようになりました。紙を破ったという達成感が伝わり、共に、Aちゃんの成長が感じられました。

視覚よりも聴覚優位のBちゃんは、カーテンの開け閉めや物が床に落ちる音、くしゃみ等の急激な音にビクッとして、への字口になり不快感を示します。反面、穏やかな口調の呼び掛けや会話の中の「ころころ」が「ちやがちや」などの擬音を聞いては、声を立てて笑います。Bちゃんの胸元に職員がBちゃんの手を添えながら新聞紙をガサガサさせたり、パンパン叩いたりすると、体をくねらせて笑います。切れ目を入れた新聞紙や障子紙の一方をBちゃんの片手に握らせ、もう一方を職員が持ちます。

手に力を入れて紙を握りしめ、そのまま体を丸めるようにして腕を動かして破いていきます。破れる音に、破り始めはビクッと「瞬間真顔」になるものの、連続して破れていくと笑っています。今後Bちゃんが、より紙遊びを楽しむためには、自発的な体の動きと音や感触が繋がるような遊び方を繰り返していくことが大切だと考えています。

子どもたちを理解する上で、一人ひとりとしつくり向き合い、僅かな目や身体の動きを見つけて、それぞれの心地よさや楽しさを追求しながら、遊びを提供していきたいと思っています。

## サービス管理課

新設

藤原 けい子

6月、サービス管理課が始動しました。

サービス管理課の主な業務は、聖隷おおぞら療育センターを利用されている方々に良い福祉サービスが提供されているかを定期的に評価し、必要な場合は改善策をつくることです。

現行のサービスは個々の利用

者にとって良いものであるか、質の高いサービスとは何であるかを考えて、より良い生活に繋げる必要があります。

サービス管理課の課題は、日常活動の質を上げることにあります。

まず手始めとして、日常活動の計画立案用紙を変更しました。活動の提供は、その日の勤務者が行うため、立案の意図をわかりやすく伝えるためです。

これまでは、計画立案はゾーンごとに管理され、ケース担当者が進めていました。良い生活に大きく関わる日常活動は、複数の違う視点をもって決定されるのが望ましいと考え、ケース担当者2名とし、ゾーンサービス管理者・サービス管理課員もアドバイザーとして計画立案に加わりました。日常活動は個々の利用者が質の高い楽しみをする時間です。良い活動をするには、利用者の表出の中から楽しみの要素を見つけなければなりません。また、それらが感じられやすい素材選びや働きかけの工夫も必要になります。しかし、表出が見えにくい、または表出の理解の難しい対象者が多く、計画立

案は思うように進みませんでした。どんな表出がどのような見られるのか、気持ちの変化が感じられる表出があるのかなど、意見交換し、ひとりひとりに合った活動内容を練っていただきました。ここにサービス管理課の多くの時間をかけています。

今後の取り組みとしては、利用者理解を深め、個々の利用者にとっての良い活動を明確にするケース会議を考えています。個別的課題を明確にしていくなかで、楽しみには段階がありその段階に合った素材や働きかけで満足感が得られることがわかりました。楽しみをつくるっていく過程においても同様です。わずかな表出のなかにも違いがあり、それを切り分けて明確にすることで、複雑に糸が絡み合ったような状態が整理されてきました。それをまとめて、必要な利用者理解をもとに個々に適切な活動内容を選択できるようにツールをつくり提示したいと考えています。

